

ここでは、本文中で使用した書誌学用語について解説する。

(配列は五十音順)

■異本（いほん）

同一の図書（作品）において、流布本または原本と内容に異なる部分を持つ図書のこと。一般には、使用文字、語句などの一部が異なる図書に対しても用いられる。

■影印本（えいいんぼん）

書物を写真製版によって複製した図書。古典籍の貴重書や稀覯本など、保存のため慎重な扱いを求められる典籍について、広く閲覧可能とし学術文化に役立てる方法としてよく用いられる。

■影写本（えいしゃぼん）

写本のひとつ。親本の上に直接料紙を載せて透き写す。印刷技術が普及する以前の複製方法として用いられた。親本の書体、字配り、行数などまで忠実に模写することが可能で、誤写が生じにくい利点がある。

■奥書（おくがき）

図書の末尾に、著述や書写の来歴、著作者、書写者、所蔵者などが記された由緒書。図書の伝来を知る重要な手がかりとなる。写本の際は通常奥書もそのまま写すが、この際原本から写された奥書を「本奥書」という。奥書は通常、写本に対して用いられ、版本の場合「刊記」がこれに相当する。現代の図書では奥付にあたる部分である。

■折本（おりほん）

卷子本を端から一定の幅で折りたたみ前後に表紙をつけた形態の図書。卷子本は、任意の場所を開くのが難しい。この不便を解消する形として折本が考案され、かなり早い時期から用いられた。「帖本」「帖装本」「摺本（しょうほん・しゅうほん）」ともいう。卷子本から冊子体（粘葉装）への移行の過渡的形態とも位置づけられる。

■卷子本（かんすぼん けんすぼん）

書物の最も原初的な形態。巻物（まきもの）ともいう。料紙を横に継ぎ、その末端につけた軸棒を芯にして料紙を巻き込んで保存する。寺社の縁起などに絵巻物の形態が多く用いられた。

■校合（きょうごう）

伝来する諸本を比較検討し、あり得べき本文の姿を決定する作業。古典籍は一般に著作者自身が記したのではなく、写本（筆写）によって伝わっている場合が多い（「土佐日記」のように筆者自筆本が伝わるのは稀）。度重なる筆写が繰り返されるうちに、誤写や改編、欠落などが生じている可能性が高い。そこで複数の写本が伝存する場合にはこれらを比較検討する作業が必要となるのである。

■外題（げだい）

書物の表紙に記される題名（標題）のこと。表紙に直接記される場合と、別の紙片に記し表紙に貼付する場合（この紙片を題簽という）とがあり、和本の場合、題簽が用いられることが多い。しかし、表紙は傷みやすく、さらに題簽ははがれやすいため伝来の途中で外題が損なわれ、補修の際などに新たに付されたものも多い。このために内題と外題が異なる書物も見られる。

■古活字本（こかつじほん）

近世初期（文禄から慶安期頃）に約50年ほどのわずかの間刊行された活字本。近世後期に再び行われる（木）活字本と区別して古活字本と称される。

日本にもたらされた活字印刷の技法には2つの系統がある。一つは、キリスト教伝来にともなってもたらされた鉛活字で、これにより印刷されたものをキリシタン版と呼ぶ。しかしこれは、キリスト教弾圧とともに途絶えたとされる。もう一つの系統が、豊臣秀吉の朝鮮出兵にともなって伝来した朝鮮銅活字である。一般にこれにより印刷されたものを古活字本（版）という。古活字本には天皇による文禄・慶長・元和勅版、徳川家康による伏見版・駿河版などがある。

■写本（しゃほん）

手書きの書物。印刷技術普及以前の図書作成方法。その成立事情によって自筆本、稿本、清書本などがあるが、通常”写本”という場合には転写本をさす。

■諸本（しょほん）

ある文献について、写本や版本などの形で複数の伝本がある場合、それらいろいろの本のこと。原典批判の対象として個別に比較して論じられる場合に用いられることが多い。

■整版（せいはん）

平たい板に文字や図版を彫刻したものを原版として印刷する方法。活字印刷と対比される。江戸時代にもっとも広く用いられた。

■善本（ぜんぽん）

作品としてではなく、典籍として内容や形式、保存状態が良い本。稀覯（稀にしか見られず貴重）であること、正しい本文を伝えていることなどが求められる。写本、版本いずれに対しても用いられる。

■草稿本（そうこうぼん）

手書きした書物のこと。印刷した版本と対比して用いられる。下書きを指す場合もある。

■底本（そこほん ていほん）

すでに書籍として成立しているものを別の形にする場合、例えば、写本を版本にしたり、翻訳、翻字、校訂などをする場合の元となる本、あるいは本文のこと。

■袖書（そでがき）

文書の末尾（左）のことを”奥”というのに対して、初め（右）の端のこ

とを”袖”という。この袖に本文の執筆者以外が書き加えた文言。本文の趣旨を認証する文などが多い。

■丁（ちょう）

1枚の（印刷した）紙。和本、唐本など袋綴の書物（いわゆる和装本）の紙数を数える際に用いられ、この場合、裏表2ページが1丁となる

■伝本（でんぽん）

代々伝来した本。”諸本”が、伝来の本のひとつひとつをさす場合が多いのに対し、”伝本”という場合にはそれらを一括して言う場合が多い。

■謄写（とうしゃ）

複写すること。謄写本とは写本と同様で、書き写したものをいう。特に公文書の複製に対して用いられる場合が多い。

■内題（ないだい）

和本、唐本や漢籍の第1丁の冒頭に記される題名。これに対し、表紙に記される題名を「外題」という。外題は欠落することが多く、後の補修の際に付け替えられることも多いことから、内題と外題が一致しないこともままあるが、この場合一般に内題が優先される。

■端本（はほん ばらほん）

欠巻欠号がある不ぞろいの図書、雑誌。一方、1冊（巻）の書籍の一部が欠落（落丁）したものを「零本」という。

■版本・板本（はんぽん）

印刷した図書。技法上は整版と活字版を含めるが、板目彫りの整版をさす場合が多い。刻本、刊本、印本、槧本（ざんぽん）などともいう。

■複製本（ふくせいぽん）

古写本または古版本を底本として、体裁や本文の文字まで底本通りに再製したもの。厳密には、①筆跡などを透写し、それを版下にして出版したものを模刻本②版本を解体し本文の1枚ずつを版下として出版したものを覆刻本③古写本や古版本を、本の大小などの体裁に関係なく写真撮影して再製したものを影印本といい、いずれも複製本と捉えられる。ただし本書では、活字本を新たな装丁で再版したものを覆刻本、写真撮影して再製したものを影印本、体裁も含め、底本と同一の形態で再度刊行したものを複製本とした。

■覆刻本・復刻本（ふっこくぽん）→「複製本」を見よ

■翻刻（ほんこく）

古典籍などの資料に書かれた文字を現行通用の字体に改めることを「翻字」といい、資料の全文を翻字して出版することを「翻刻」という。翻字の際には資料の元の姿を活かして、解釈などを混入させないことが原則とされる。

主な参考文献

『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄ほか編 岩波書店1999 [010.21/4]

『図書館学・書誌学辞典』植村長三郎編 有隣堂印刷1967 [010.33/6]